

## 49. 壱

## 岐

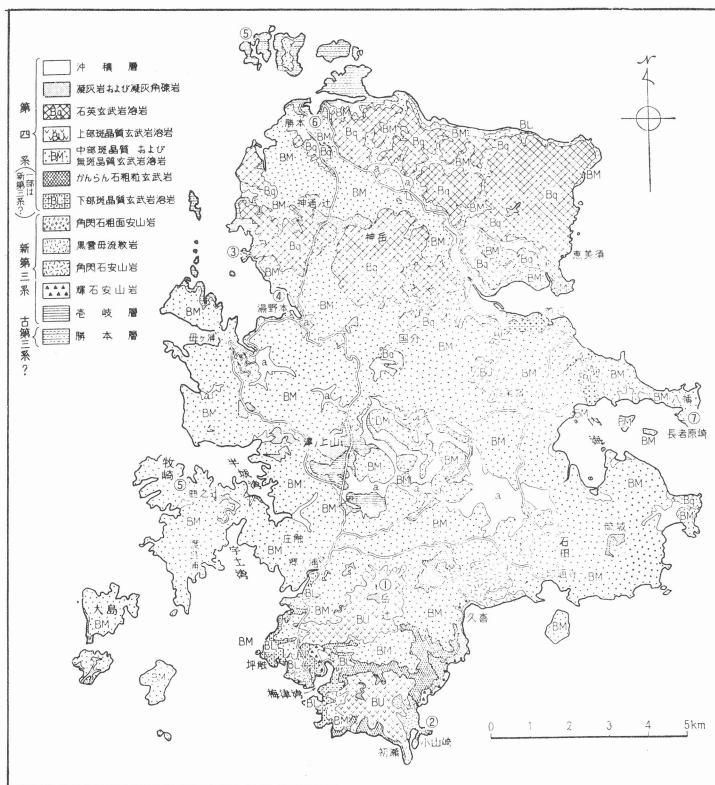
地 域	壱岐郡郷の浦町・勝本町・芦辺町・石田町
交 通	空路 福岡板付空港—壱岐空港 航路 九州郵船 博多—壱岐（郷の浦・勝本・芦辺）、 呼子—壱岐（印通寺）
地形図	郷の浦・勝本・芦辺（1/50,000）

玄海難の中に厚い板を浮かべたような壱岐の島は、雪の結晶の形にも似た、南北約17km、東西約15km、面積139km<sup>2</sup>の本島と北部の名島島・若宮島・辰ノ島、南部の大島・長島・原島・机島および南東部の妻ヶ島などの属島を包含している。

壱岐は古くから大陸航路の要地であり、本土に先がけて大陸文化を吸収していたことは、島に残されている多くの古墳群が物語っている。また、島には鬼にまつわる伝説が多く、“鬼の岩屋”とよばれる遺跡や、壱岐を飛び石にして大陸に渡ったという“鬼の足跡”も存在する。

いわゆる玄武岩台地の壱岐島は、全島が玄武岩におおわれていて起伏が少なく、最高峰の岳の辻でも海拔高度213mにすぎず、高度100mを越える山地が占めている面積はきわめて少ない。分水嶺は西にかたより、東部はかなり開析が進んでいる。すなわち島の南部を西から流れて東海岸に注ぐ河内川の流域の平野は本島最大であり、北部にもかなりの流域面積をもつ谷江川が東海岸に注いでいる。それに対して西海岸に注いでいるのは塩田院川だけであり、しかもその流域面積はせまい。

この島の基盤岩は第三系の勝本層で、勝本町や芦辺町などの北部地域に限って、小地域に分布している。この勝本層は砂岩と暗灰色泥岩の互層で、厚さは100m以上と推定されている。島の東端の八



壱岐島地質図  
 (地質調査所原図〈松井和典 1958〉の一部を改変したもの)

幡半島の長者原崎や島の中央部、あるいは南部の久喜付近には新第三系の堆積岩が分布する。この堆積岩は凝灰質砂岩・泥岩・流紋岩安山岩・玄武岩などの火山れきが互層になっている。しかしその層序は分布が断片的であるため、まだ不明の点も多い。これら第三系をおおい、あるいは貫ぬき、流紋岩・安山岩・玄武岩などの火山岩類が広く分布している。

表1 宍岐地質層序表

野田 光 雄 (1953)			松 井 和 典 (1958)		
第 四 紀	沖積世	沖積層	第 四 紀	現世	沖積層
	洪積世	第4次玄武岩		更 新 世	玄武岩溶岩類
志原層		上部玄武岩溶岩			
第 三 紀	新第三紀	第3次玄武岩	中部玄武岩溶岩		
		安山岩	粗粒玄武岩		
	印通寺層	石英粗面岩	下部玄武岩溶岩		
	第2次玄武岩	流紋岩類			
紀	新第三紀	長者原層	鮮 新 世	宍岐層	上部 安山岩類
		第1次玄武岩			宍岐層下部
	古第三紀	勝本層	中 新 世		勝本層

現在示されている層序表は次の通りである。この2つの表の食い違う点などは、昭和46年3月から始まった宍岐島地学総合研究の数回の調査でしだいに明らかになっていくことであろう。

玄武岩溶岩類については松井和典(1958)により詳細に研究され、表2に示すような岩型に識別されている。

噴出順序は1, 2, 3……の順序に行なわれたものと考えられている。

ここでは種々の問題点の検討や詳細な地質層序の説明はおこなわず、いくつかの地点を選んでその概略を説明するのにとどめる。

### 1. 岳の辻・津ノ上山の火山碎屑丘(ホマーテ)

宍岐島における火山活動の最後の姿が、岳の辻(212.9m)や津ノ上山(133.7m)によく保存されている。岳の辻の頂上には展望台やNHK, NBCテレビ中継アンテナが建てられている。この展望台からの景観はすばらしく、北部の山陵地域の一部を除くほぼ全島が眺められる。これらの火山は玄武岩溶岩類の上に噴出した火山弾を含んだ火山碎屑丘で、爆裂火口の跡は岳の辻では北面と南面に2個ずつ計4個が見られ、津ノ上山では北西に開口した火口が残っ

表2 壱岐島玄武岩類の諸岩型 (松井 1958)

5. 石英玄武岩溶岩	{ 上部石英玄武岩	B <sub>q2</sub>
	{ 下部石英玄武岩	B <sub>q1</sub>
4. 上部斑晶質玄武岩溶岩		B <sub>u</sub>
3. 中部斑晶質玄武岩溶岩および 無斑晶玄武岩溶岩	{ かんらん石普通輝石玄武岩	BM <sub>4</sub>
	{ かんらん石玄武岩	BM <sub>3</sub>
	{ 無斑晶質玄武岩	BM <sub>2</sub>
	{ 斑晶質玄武岩	BM <sub>1</sub>
2. かんらん石粗粒玄武岩		D <sub>o</sub>
1. 下部斑晶質玄武岩	{ 普通輝石かんらん石玄武岩	BL <sub>2</sub>
	{ チタン輝石かんらん石玄武岩	BL <sub>1</sub>

ている。また、郷の浦港北西の鹿の辻も同じ型式の火山と見られている。これらの地域の火山噴出物の中に、斜長石・磁鉄鉱・角せん石の大型の結晶が含まれていて容易に採集できる。斜長石は中性長石で1~3cmの大きさ、角せん石はチタンを含んだケルスート角せん石とよばれているもので1~2cmの大きさであるが、まれには3cmを越えるものもある。

## 2. 初瀬<sup>はせ</sup>の流紋岩と玄武岩岩脈

壱岐島の最南端の初瀬付近には、流理構造がはっきりした流紋岩が分布している。初瀬の東海岸にはこの流紋岩中に貫入した幅18mほどの玄武岩の岩脈が見られる。この岩脈は県の天然記念物である。白い流紋岩中に黒い玄武岩の岩脈がほぼ垂直に貫入していて、みごとなコントラストをなしている。岩脈の周辺部では流紋岩の岩片を捕獲岩として取り込んでいる。玄武岩が割れ目噴出をして、地表にあふれ出る過程を説明する貴重な地学的資料といえよう。

## 3. 鞍間の滝と雪ノ島の流紋岩

湯野本湾北方の鞍間の滝は、勝本層を貫く角せん石安山岩の断崖である。接触部には勝本層の砂岩やけつ岩が捕獲されているのが見られる。壱岐ではしばしば海食崖のことを滝とよんでいる。

鞍間の滝の東海岸に突出した流紋岩の小岩体があり、これが漂れ

きによって陸続きとなった雪ノ島がある。土地の人の言い伝えで、雪ノ島が真白になると天気は良くなり、灰色になると悪くなるという。

#### 4. 湯野本温泉と象化石

湯野本は本島唯一の温泉である。湯野本から北西—南東方向に島を横断する構造線にそって、小規模な流紋岩・石英斑岩などの酸性貫入岩がみられるが、それらの活動が温泉源と密接な関係にあると推定されている。温泉は60℃前後で、泉質は炭酸泉である。

湯野本の西方約1.5 kmの六郎瀬鼻の北向きの海食崖から、ステゴドン象の化石が産出した。発見されたのは昭和46年1月で、流紋岩質のれき岩層からである。このれき岩層は島の中央部に分布する壱岐層とほぼ同じ時代の堆積物と推定されている。

#### 5. 牧崎と辰の島の海食洞

伝説的な“鬼の足跡”とよばれる陥没海食洞が、郷の浦町牧崎と勝本町辰の島に見られる。牧崎のものは玄武岩中にできた海食洞の奥が陥没してできた凹地であり、辰の島の方は勝本層の垂直的な節理が波食によって拡大され、高さ数10mの絶壁をもつ東西性の細長い切れ込み“蛇ヶ谷”と、さらに洞の奥が陥没してできた凹地“鬼の足跡”である。いずれも途中のトンネルを通して、海水がたえず出入りしている。

#### 6. 勝本町城山の褶曲

勝本町の城山公園の登り口に、勝本層の褶曲構造が見られる。同層のけつ岩層が西方からの圧力を受けてできた衝上断層を伴った一種の横臥<sup>が</sup>褶曲で、規模は小さい。しかし最近はコンクリートにおおわれていて全容が見られないのは残念である。城山公園は上部が玄武岩によっておおわれている、溶岩台地の遺物（ビュート）である。この公園と勝本小学校の間の勝本層中から植物化石が産出する。

#### 7. 八幡半島の珪藻土とピート

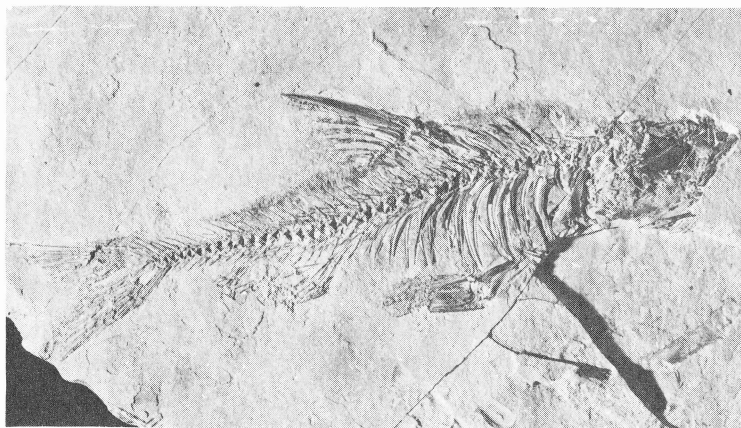
八幡半島の先端長者原崎には玄武岩や火山砕屑岩にはさまれて珪藻土層が分布する。全層厚は約60mと推定される。珪藻土層から珪

藻化石・昆虫化石・植物化石・魚化石などが産出する。この中で魚化石は古くから産出が記されていたもので、ニシン科でイキウス ニツポニクスと名付けられた。この珪藻土層は岩質や植物化石からグリーンタフ地域の台島層に対比されている。

八幡半島の中央部にある八幡小学校付近の北海岸に、2枚の玄武岩にはさまれて泥炭(ピート)が存在する。このピートの上位の玄武岩の下底は枕状の節理を示しており、かつてマグマが水中に流出したことがうかがえる。下位の玄武岩は、八幡半島の先端でみごとな柱状節理を示している。

湯野本の象化石や八幡半島のコイ科—淡水魚の化石はこれらの地層が堆積した頃壱岐島は大陸と陸続きであったことを物語っている。

(石川直衛)



イキウス ニツポニクス(*Iquius nipponicus*)

地質調査所標本室に陳列されているもので、全長24cmあり、従来ニシン科の新属とされていたが、友田淑郎(1970)によってコイ科の*Cyprinus carpio* L. とされた。

(撮影 正井 義朗氏)